

石川県七尾市

統一アセスメントを活用した中高連携で
高校英語への接続をスムーズに

石川県七尾市では、2012年度から、地域の高校が実施していた外部の英語力テストを、市内の中学3年生全員を対象に実施。中高が同じアセスメントで子どもの英語力を測り、指導に生かしている。2014年度には、中学校と高校の交流事業も開始。高校英語の実態を率直に伝えたことによって、中学生と中学校教員の英語学習に対する意識が変わりつつある。

石川県七尾市

◎石川県能登地方の中心都市で、能登半島の中央部に位置する。2004年に1市3町が合併して現在の形となった。七尾市を含む能登の里山里海は、2011年、世界農業遺産に認定された。
面積/約318 km² 人口/約5.6万人 小学校/13校*1 中学校/6校 児童生徒数/約4,000人
教育委員会 所在地 〒926-8611 石川県七尾市袖ヶ江町イ部25
電話 0767-53-8434
URL <http://www.city.nanao.lg.jp/kurashi/kosodate/inkai/index.html>

教育長インタビュー

校種を超えた「チーム七尾」で
たくましく生きる子どもを育てる

七尾市教育委員会 教育長 近江一芳

学力差を縮めて
全ての子どもに学力保障を

七尾市は、「ふるさとに誇りをもち、将来、国際社会をたくましく生きる子どもの育成」を教育目標に掲げ、教育活動に取り組んでいます。今後5～10年で七尾市の子ども数は減っていく見込みです。小・中学校の統廃合が進み、複式学級も2校存在します。そうした中、能登地域の中核都市として七尾市が元気の能登を情報発信するためにも、教育が

重要であると考えています。

本市の教育における課題の1つは、学力のばらつきです。市内には小学校13校*1、中学校6校がありますが、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果を経年分析すると、地域間や学校間だけでなく、学年間・学級間にも大きな差があることが分かりました。本市が独自に小学3年生以上を対象に行っている学力調査でも同様の傾向が見られています。

学力は全ての子どもに保障しなければなりません。そのためには、組



おうみ・かずよし 2003年七尾市教育委員会学校教育課長、2005年七尾市立朝日中学校校長、2008年七尾市立田鶴浜小学校校長等を歴任。2013年から現職。「[地域づくりは、人づくり]をモットーに、七尾市の10年、20年先を見据えて職務に当たっていききたい」

*プロフィールは2015年3月時点のものです。 *1 2015年度は統合再編があり、小学校は12校となる。

織的に教員の指導力を向上させ、「学校力」を高めることが急務です。先生方にアセスメントの結果を示しながら理解を求め、小中高が連携し、さまざまな取り組みを行っています。

市内全校の小中高連携で 教員が互いの良さを学ぶ

取り組みの1つめは互見授業です。各校が研究授業を行う際には、市内全ての小中高に通知しています。教員は誰でも参観でき、事後研究会にも出席して意見交換をしています。

2つめは教科部会の充実です。本市には小規模校が多く、特に中学校では1教科当たりの教員数が少ないために校内研修が十分に出来ませんでした。そこで、学校を超えて同じ教科の教員が集まって研修を行う教科部会を、定期的実施しています。

そのようにして進めてきた連携を更に深化させようと始めたのが、「授業改善推進会議」と「学力向上推進会議」です(図1)。

「授業改善推進会議」は、各小・中学校の研究主任が参加し、教員が誰でも同レベルの授業が出来るような学習スタイルの構築を研究テーマとしています。「定着型」「問題解決型」「課題発見型」「活用型」と、目的に応じた授業の進め方の「型」をつくるのがねらいです。2013年度は各

校で1～3の型を作成して発表し、2014年度は各校でその型を実践しながら改善に努めました。

「学力向上推進会議」では、学力向上を目指す、授業以外での活動を研究しています。本市では校内研究の分掌に研究主任と研究副主任を置き、副主任を学力向上推進委員として、帯タイム(朝、昼休み、放課後)や家庭学習の改善の研究を進めています。

以前はどの学校でも、授業の進め方などは教員個々に任される傾向にありました。しかし、推進会議や学校の授業の様子を見ると、今は学校全体で教育改善に取り組もうという意識が高くなったと感じます。高校教員が小学校の、小学校教員が高校の授業を参観することは珍しくなく、各校の研究授業にはいつも大勢の先生方が参加しています。

小中高連携の成果は、徐々に表れてきています。帯タイムでは、どの学校も基礎・基本の定着だけでなく活用問題も取り入れ、学力上位層への対応も始めました。自校の児童生徒に応じて活用力を付けるため自作問題を使っていますが、これが先生方の指導力向上にも結び付いています。また、「全国学力・学習状況調査」において、学校の平均点が県の平均以下だった小学校が、2014年度には平均点以上になるなど、学校間の

差が縮まりつつあります。

高校の英語指導の知見を 小中にも生かす

七尾市内の教員間連携が強くなったことを受け、更に学力向上に切り込もうと、2012年度、石川県立七尾高校との英語における中高連携を始めました。各種学力調査の結果を見ると、市内の中学校では英語の成績が県内の他地域と比べて低く、5教科の中でも弱点であることが分かったからです。特に、県内の金沢市は「小中一貫英語教育特区」として英語教育に力を入れているので、本市も対策を取らなければ、他地域との差が開くばかりです。

本市では、人口減少対策として定住促進だけでなく、本市を訪れる交流人口の増加を重要施策に位置付けています。特に北陸新幹線が開通し、能登地域へのアクセスも良くなりました。観光業の活性化が期待され、外国人観光客に対応できる人材の育成が重要になってきています。国際社会で活躍する人材と共に、地域においても英語力は必要なのです。

これらの観点から英語教育を重点化し、高校の英語教育の知見を小中学校の指導に生かせるよう、学校種を超えた連携を図っています。また、保護者にも英語力の重要性を理解してもらい、家庭の協力も得られるよう、子どもが英語を使って活動する様子を保護者が見る機会を設けるなど、意識的に働き掛けています。

教科部会や2つの推進会議などを通して、「チーム七尾」として市全体の教育力が高まってきています。失敗を恐れずに新しい取り組みに挑戦できるように、そして、先生方の本分である教育に力を発揮できるように、これからも教育環境を整えていきたいと思っています。

図1 2014年度 授業改善・学力向上推進会議の内容

① 授業改善推進会議 全小・中学校の研究主任が参加

- 第1回 学習スタイル情報交換(授業の進め方の「型」づくり)
- 第2回 学習スタイルに基づく授業実践(模擬授業 小学校:国語・算数、中学校:美術)
- 第3回 活用を意識した発展学習研究授業(中学校:理科)
- 第4回 実践発表会

② 学力向上推進会議 全小・中学校の学力向上担当者が参加

- 第1回 帯タイムの持ち方の交流
- 第2回 帯タイムの有効な実践の交流
- 第3回 活用力問題作成
- 第4回 実践発表会

*七尾市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

教育委員会の取り組み

中高合同の教員研修会や模擬授業を通して 教員の意識改革が進む

中高統一のアセスメントで 英語教育の課題を浮き彫りに

七尾市教育委員会は、石川県立七尾高校からの働き掛けをきっかけに、同校と市内6中学校との中高連携を推進している。七尾高校では、入学時に国語や数学に比べて、相対的に英語の学力が低いことが恒常的な課題であると、同校の山本登紀男前校長から三浦光雄前教育長に説明があったためだ。

更に、七尾高校が行う中学生向けの学校説明会でされた、高校生のアドバイスの影響も大きかった。「英語はとても大事だから、中学校では英

語を頑張っておいた方がよい」「高校でいちばん困るのは英語だ」と、口を揃えて中学生に伝えていたという。

「教員も生徒も、英語が最も課題だと言っている。それなら、中学生と高校生との英語力の差を検証しようということになりました」と、学校教育課の藤澤浩課長は説明する。

2012年度、市内の中学3年生全員がGTEC for STUDENTSを受検した。七尾高校では10年以上継続して受検している英語力テストであり、中学生・高校生の英語力を同じ指標で測れるからだ。更に、Listening、Reading、Writingの技能別にスコアが出るため、課題のある分野を抽出できるという利点もあった。

受検に際しては、「中学校では学習指導要領に基づき十分に指導している」「英語力は他の試験でも分かる。外部試験を行う必要があるのか」という疑問の声もあった。そこで、前校長や高校教員が中学校校長会や教科部会に参加し、高校のデータを示しながら、高校生の英語力の実態や、統一したアセスメントで英語力を測る重要性を説明。まずは詳細な実態把握が必要という理解を得る努力をして、受検が決まった。市が半額を負担し、残りを受検者負担とした。

GTEC for STUDENTSの結果は、高校側の課題意識を裏付けるものであった。

「中学3年生と高校生のスコアの差はあまりにも大きく、高校1、2年生で大幅に伸びていることが分かり

ました。逆に言うと、中学校側は生徒の力を伸ばし切れていないという課題を突き付けられることになりました」と、学校教育課の種谷多聞課長補佐は振り返る。

2012年度はWritingのスコアが他の2技能に比べて低かったため、2013年度には、各中学校が宿題などで英作文を課し、添削を行うといったWritingの指導を意識して行った。すると、同年に受検した時にはWritingのスコアが大幅に上昇。この経験が教員の意識を変えた、子ども教育課の内田幸子指導主事は言う。

「客観的な数値の説得力は、大きなものがありました。自分たちにはもっと出来るのではないか、中学校での英語指導を見直す機運が高まり、英語力テストも受け入れられるようになりました」

中学校の英語の授業が “Almost All English”に

このようにして中高の関係を築いた上で始めたのが「中高連携推進事業」だ(図2)。2014年度の実施初年度は、中高の教員の交流と、中高の生徒の交流を柱とした。初年度の目的は「七尾高校に学ぶ」。高校ではどのような指導をしているのかを学び、中学校の授業改善に生かすことをねらいとした。

中高教員の交流は年4回実施。いずれも、市内6中学校の英語科教員約20人、ALT6人は全員参加し、七尾高校の英語科教員10人、ALT2人



七尾市教育委員会
学校教育課長

藤澤 浩

ふじさわ・ひろし

「『生きる力の育成』を目標に各校の授業改善を進め、学力向上を図っていきたい」



七尾市教育委員会
学校教育課長補佐

種谷多聞

たねたに・たもん

「英語を通して、ふるさと七尾を世界に発信し、心身ともにタフな七尾っ子へ」



七尾市教育委員会
子ども教育課指導主事

内田幸子

うちだ・さちこ

「子どもたちが国際社会をたくましく生き抜くために、小中高を見通した広い視野での指導を心掛ける」

*プロフィールは2015年3月時点のものです。

も所がない限り参加した。

「ALTは各中学校に1人常駐しており、ほぼ全ての英語の授業を担当しています。T2としての役割に悩んでいるALTもいますので、参加してもらいました」(種谷課長補佐)

教育委員会が場の設定と大枠を決め、内容は高校側に委ねた。高校が交流全体を通して強調していたのは、All Englishによる授業の実施だ。

「第1回の研修会で『日本語は授業で全く使わない』という高校の先生の説明に、中学校の先生は驚いていました。しかし、『生徒が分からないからと少しでも日本語を使うと、生徒はそれを期待してしまい、英語学習の妨げになる』という説明に納得したようでした」(内田指導主事)

中学校教員のそうした意識の変化を後押ししたのが、第2回の模擬授業だ。中学3年生2学期のある単元を設定し、中高教員のティーム・ティーチングによるAll Englishの授業を行った(詳細はP.18~21参照)。

「生徒役となった英語科教員は、第1回で聞いた説明を実際に体験し、英語で授業を進めた方がよいという意識が強くなっていました。今では、どの先生も“Almost All English”で進めています。中学校を視察した方々が皆、『生徒が英語をたくさん活用しながら授業が進められている』と驚かれるほどです」(内田指導主事)

中学生と高校生の交流は年3回実施。七尾市立朝日中学校を拠点校とし、同校の3年生が高校での英語学習を体験できるよう、高校と中学校とが話し合いながら内容を設定した(詳細はP.18~21参照)。高校の教員とALTによるAll Englishの出前授業や、中高生混合チームによるディベート大会と、中学生にとってハードルの高い活動だったが、高校で学ぶ英語のレベルを知り、「もっ

図2 2014年度 中高連携推進事業概要

中高教員の交流 原則として中学校英語科の全教員、七尾高校英語科の全教員が参加

第1回(5月) 英語力調査の結果分析と七尾高校の指導法研修	<ul style="list-style-type: none"> 「GTEC for STUDENTS から見た七尾市の英語力の現状とGTEC for STUDENTS の活用について」外部講師の説明 「七尾高校における英語科指導法」七尾高校英語科教員による研修 グループ協議「英語科で取り組む授業改善」「英語科での個別支援計画と進捗」
第2回(8月) 模擬授業	<ul style="list-style-type: none"> 高校教員をT1、中学校教員をT2とし、その他の英語科教員を生徒役として模擬授業を実施 「All English でのT Tの模擬授業から生徒の主体的な学びについて考える」 グループ協議「T2の支援が有効だったか」「活用場面で生徒が主体的に活動できたか」など
第3回(12月) 研究授業と講演会	<ul style="list-style-type: none"> 中学校教員による研究授業 「Can-do リストと評価のつながりについて」広島大学附属中学・高校の教員による講演 グループ協議「本時での評価場面における評価は適切だったか」「本時のねらいとCan-do リストの関連はどうだったか」など
第4回(2月) 英語力調査の結果分析と次年度に向けての協議	<ul style="list-style-type: none"> 「GTEC for STUDENTS」の2014年度の結果と分析 グループ協議「教員の英語力は向上したか」「来年度に向けて改善すべき点は何か」など

中学生と高校生の交流 拠点校・朝日中学校の3年生と七尾高校の生徒との交流

第1回(6月) 七尾高校見学	<ul style="list-style-type: none"> 高校生による英語学習についてのアドバイス、質疑応答 理数科・普通科文系フロンティアコースの海外学習報告プレゼンテーション
第2回(7月) 出前授業	<ul style="list-style-type: none"> 七尾高校の英語科教員とALTによる中学校での出前授業
第3回(12月) ディベート大会	<ul style="list-style-type: none"> 中学3年生52人と、高校普通科2年生30人が混合チームをつくり、英語でディベート

*七尾市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

と英語を学びたい」と前向きな声が多く聞かれたという。

6年間のCan-do リスト作成と小中高の連携が課題

今後の課題は、中高6年間を見通したCan-doリストの作成だ。中学校ではCan-doリストを作成したばかりで、高校でもCan-doリストの十分な活用が今後の課題となっている。今後、中高接続を意識した授業を進める上で、一貫性のある評価が重要になる。そうした考えから、第3回の中高教員の交流では、中学校教員がCan-doリストを生かした研究授業を実施し、Can-doリストの活用に詳しい識者による講演が行われた。

もう1つの課題は、小学校での英語の教科化を見据えた小中高の連携だ。「模擬授業では、希望者の小学校教員も生徒役を務めました、『英語が分からず、授業についていけない子どもの気持ちがあった』と話す先生もいました。小学校で英語が教科になると、小学校段階で英語嫌いになってしまう可能性があります。そうならない指導を考えなければなりません」と、藤澤課長は語る。

小学校の外国語活動で出前授業を行う中学校もあるが、小中のスムーズな連携のためにも、2015年度は小学校の拠点校を決め、中学校の拠点校も新たに置いて、小中高連携を推進していく考えだ。

高校での実践

高校英語の実態を伝え 中高が協力して 生徒の英語力を高めていく

石川県立七尾高校

◎ 1899 (明治 32) 年創立。普通科・理数科を擁する全日制の共学校。例年、東京大、京大、医学科など、国公立大に 140 人前後の生徒が進学。能登地域の拠点校として、半島全域から生徒が通う。

校長 福島則明先生

生徒数 716 人 学級数 18 学級

住所 〒 926-0817
石川県七尾市西藤橋町工 1-1

電話 0767-52-3187

URL <http://www.ishikawa-c.ed.jp/~nanafh/>



校長会や教科部会に参加して 直接、思いを伝える

石川県立七尾高校は県下有数の進学校だ。文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」に 2003 年度から 3 期連続で指定を受け、2012 年度には普通科に英語力・コミュニケーション能力の育成を特色とした「文系フロンティアコース」を立ち上げた。教育目標に「国際的に活躍する人材の育成」を掲げ、学校全体で英語教育に力を入れている。英語の授業を「聞く」「読む」「話す」「書く」の 4 技能を意識して展開。海外研修、スピーチコンテスト、ディベート大会などの行事を設けて、生徒が英語を使う場を提供すると共に、「英語が通じた」という達成感を持たせ、学習の動機付けに結び付けている。

同校が英語教育に注力するのは、グローバル社会では英語力が重要であり、更に生徒の希望進路実現にお

いて英語が課題であるからだ。

1 年生からサイドリーダーや週末課題などを多用しながら、入学時点で金沢市内の進学校と比べて開きのある英語力の向上に努めているが、生徒の英語力が上がっても他校との差が大きく縮まることはなかった。そうした状況は数年間変わらず、中学校段階で英語力を上げておかないと、根本的な解決には至らないと考えた。

「高校 3 年間だけでは、指導を工夫しても、本校が目標とする英語力には到達できませんでした。中学校と高校が協力し、6 年間で指導を考える必要があると考えた山本登紀男前校長が、中高連携を七尾市教育委員会に提案したのです」と、福島則明校長は話す。

七尾市の三浦光雄前教育長は高校校長の経験があり、前校長の考えに理解を示した。しかし、中学校現場が納得しなければ授業は変わらない。そこで、前校長は七尾市の中学

校校長会に参加。高校の現状を説明し、早い段階から英語の指導を強化する必要性を訴えた。まずは中学校校長の意識を変え、課題意識を現場の教員に広めてもらおうとしたのだ。そのように意識を掘り起こした上で、英語教科部会に前校長や高校教員が出向き、改めて同校の英語力の実態や客観的な指標の必要性などを説明し、現場の納得を得た。

「模試の成績などの資料も示しながら、私たち高校側の思いを直接、中学校側に伝えていきました。教科部会や研究授業で、中学校の先生に高校の現状をいきなり訴えても、先生方は戸惑うだけでしょう。理解してもらえるように、校長、教員と段階を踏んで説明しました」(福島校長)

外部試験の結果を基に 1 年生の指導計画を立案

2012 年度、中学 3 年生が受検した GTEC for STUDENTS の結果は、早速、高校の指導に生かされた。同校に進学する生徒の結果を抽出して集計し、その分析を基に 1 年生の英語の指導計画を立てた。七尾市内の中学校出身者が約 6 割を占める同校では、学力傾向はこの検定結果で十分につかむことが出来る。英語科の中澤賢先生は、次のように説明する。

「高校では授業が格段に難しくなるので、1 年生でつまずき、苦手意識を 3 年間引きずる生徒がよく見られます。中高をつなぐブリッジ教材は重要で、毎年、どのような内容にするか悩んでいました。それが、外部試験の実施により、入学時点での技能別到達状況を踏まえた上で指導を考えられるようになりました」

2013 年度入学生の場合、Writing のスコアが高く、Listening、Reading に課題があることが分かった。そこで、1 学期は Writing を中心に進めて

*プロフィールは 2015 年 3 月時点のものです。

生徒に自信を付けさせ、ListeningとReadingは時間を掛けてじっくり取り組むという方針にした。

「導入期指導がうまくいったためか、2013年度入学生の英語の偏差値は、例年以上に順調に伸びています」と、中澤先生は手応えを語る。

交流を通して 中学校教員の意識が変化

高校側に有益な情報をもたらしている英語力テストだが、中学校では初めての受検であり、効果的に活用されていなかった。そこで、中高連携推進事業では、高校教員が英語力テストの活用法、高校英語の実態を伝えることに注力した。

第1回の研修会では、同校が英語を含む全教科で取り入れている「目標管理型」による指導法などを説明した。これは、現状分析をして課題を整理し、目標を立て、目標とする力を付けるための指導を行い、生徒の学力変化を検証するという流れだ。その手法について、英語力テストを活用した例を示しながら説明した。

第2回の模擬授業では、高校側の提案により、Readingの力を高めるため、All Englishでのティーム・ティーチングを行った(写真)。中学生の英語力テストで、Readingが強化ポイントに挙がったからだ。T1の高校教員とT2の中学校教員が協力して授業案を作成。題材の選定や出題形式など、丁寧に意見交換を重ね、Readingの力に結び付く指導のあり方を示した。

「高校入試で出題されるくらいの量の英文を、中学生に普段の授業でも読ませてほしい。更に、Readingで大切な内容を理解する力と、理解したことを表現する力も付けてほしいと考えました。そこで、模擬授業も、会話形式の活動ではなく、課題文をしっかり読ませた上で4技能を使う活動



写真 8月に行った模擬授業(写真左)と、授業後のグループ協議の様子(写真右)。『I Have a Dream』というキング牧師の演説を題材に、授業を展開した。中高連携以外でも教科部会などで顔を合わせているメンバーのため、率直な意見交換がなされた。

となるようにしました」(中澤先生)

第4回では、英語力テストの結果を分析した後、各校の取り組みを発表し、次年度に向けた改善点を討議した。中学校教員からは、個別対応が必要な生徒もいる中でのAll Englishの授業の進め方など、前向きな意見が出されていたという。

高校英語を意識させるという方針は中学生との交流においても同じで、All Englishの出前授業、英語ディベートと、高校で学ぶ英語の授業を行った。ディベートでは、ディベートに慣れていない普通科普通コースの2年生30人が参加。中学生と協働して行う活動とした。「ディベートは中学生には難しすぎるのではないかと」の懸念の声が高校側でもあったが、中学生に高校での英語の目標を知ってもらうこと、普通コースの生徒にはもう少し頑張れば自分の英語力でもディベートが出来るという意欲を持たせることをねらいとして行った。

先を見通した中高連携が 生徒の可能性を広げる

中高連携推進事業は、高校教員にも多くの収穫をもたらした。同校では生徒の入学時の学力が幅広い。中学校が行う多様な学力層への指導法や、授業でのICTの活用法などを学び、視野が広がったという。

2014年度はほかに、インターンシップとして、教員志望の生徒が

出身中学校に夏休みの3日間訪れ、チューターとして中学生に学習指導の補助を行った。今後は、このような生徒同士の中高連携を更に広げていきたいと、中澤先生は語る。

「中学生の学力が上がれば、私たちが思い描く活動がより早い時期から出来るようになり、子どもの未来がもっと開けるはずです。今後、もっと先を見通して、中高連携の内容も改善していきたいと考えています」

2015年度の高校入試では、文系フロンティアコース(入学定員40人)の志願者が、2014年度の42人から62人となった。生徒の英語への意欲が高まっていることがうかがえる。

「2015年度入学生は、中高連携推進事業の1期生となります。英語力は以前と比べて伸びているのか、どのような成果が見られるのか、期待しています」(福島校長)



石川県立七尾高校
校長

福島則明

ふくしま・のりあき

「地域の教育力、石川県の教育力を高めていきたい」



石川県立七尾高校

中澤 賢

なかざわ・さとし

英語科担当。「高校のことを小学校にも中学校にも知ってもらえるように努めていきたい」

中学校での実践

中学校と高校、 直接、顔を合わせる交流が 生徒と教員の意識を変えた

七尾市立朝日中学校

© 1979 (昭和 54) 年創立。校訓は「決意を実践に移せ そして栄光を信ぜよ」。毎朝 10 分間の朝読書のほか、隔週で新聞読書を実施。気になる記事の感想文を書き、全校生徒分を張り出す活動も行う。

校長 井田正輝先生

生徒数 172 人

学級数 7 学級 (うち特別支援学級 1)

住所 〒 926-0084 石川県七尾市下町戊部 17-1

電話 0767-57-1540

URL <http://www.city.nanao.ishikawa.jp/asahityu/>



高校教員の出前授業で All English を体験

七尾市立朝日中学校では、引っ込み思案な生徒たちに表現力や主体性を身に付けさせたいという思いから、ペア活動やグループ活動、「問題解決型」の授業を以前から行っていた。

英語では、全学年で「ベーシック」「アベレージ」の習熟度別に授業を展開。自分で課題を決めて取り組む「英語マラソンノート」なども活用し、学力の底上げを図っている。更に、

週末課題として、学年ごとにテーマを課して英文を書き、ALTが添削したものを「Writing Notebook」に蓄積するという活動も行い、Writingのスキル向上にも力を入れている。

このような活動に積極的に取り組んできた同校は2014年度、中高連携推進事業の拠点校として、中高生の交流事業を3年生(52人)を対象に年3回行った(P.17図2参照)。

第1回は6月に実施。中学生が七尾高校を訪れ、高校2年生4人の案内で学校施設を見学した後、高校の

学習・生活両面の紹介と、理数科・文系フロンティアコースそれぞれの海外研修の報告が行われた。更に、中学生が高校生に英語学習について質問し、アドバイスをもらった。

「高校生の先輩からの言葉は、生徒の心にすっと入っていったようです。高校入学後に苦労したことや成功体験などを聞き、生徒たちは英語を学ぶ意義を改めて感じていました」と、英語科の政氏美香先生は話す。

夏休み前に行った第2回では、七尾高校の教員とALTが中学校で出前授業を実施。中学校側が3年生の授業進度を高校側に伝え、それに応じて現在完了形を用いる内容だった。日本語を一切使わないAll Englishの授業で、単語の発声練習からカードゲーム、インタビューを行い、最後は民話『桃太郎』を現在完了形を用いて英文で書くという、4技能を関連付けた活動となっていた。

生徒にとって初めてのAll Englishによる授業だったが、「全く分からなかった」と学習意欲を失いそうになっている生徒がいる一方で、「分かりやすい英語で説明してくれて、とても良かった」と前向きな感想を述べる生徒もいたという(図3)。

高校生との交流を通して 高まる生徒の英語への意識

最もレベルが高く、密度の濃い交流となったのが、第3回(12月)に

図3 中高連携事業の中学生の感想(抜粋)

出前授業の感想

- ALTの先生が英語を話しながらも分かりやすく説明してくれて、とても良かった。教科書ではなく、誰でも知っている物語での英語の授業はとても楽しかった。
- グループ学習やいろいろな人との会話がたくさんあって楽しかった。最後の英文作は、現在完了形の文を見つけるのが難しかった。
- とても面白くて、英語を楽しく身に付けられそうだった。七尾高校の授業がこのような感じなら、行ってみたいと思った。

ディベートの感想

- すごいのは発音ではなく、考える力なのだと分かった。
- 相手の意見や考えをしっかりと聞き、そこからたくさんの言葉や単語を考え、素早く文にすること。そのような積極性を学んだ。
- たくさんの外国人とコミュニケーションを取れるといいなと思った。身振り手振りで表現したり、単語だけでも話せるようになりたい。
- 高校生の発音がかっこよかった。自分も上手になりたいと思った。

*朝日中学校提供資料を基に編集部で作成

*プロフィールは2015年3月時点のものです。



写真 ディベートの論題は「Junior High School students should have a cell phone.」。チームの組み合わせは当日発表。その場で中学生と高校生が打ち合わせをして、ディベートを行った。

行われたディベートだ。中学校側は中高生が交流できるような英語活動を考えていたが、高校側から高校の英語教育の目標の1つであるディベートを行いたいという提案があった。論題の通知から実施日まで約1週間と短かったが、「中学生は携帯電話を持つべきか」という論題に対し、生徒たちに賛成・反対の両方の意見を考えさせ、英文で書き、発表の練習を行った。

当日は、中学生2人と高校生1人が1チームとなり、3チームずつの7テーブルに分かれて行われた。賛成・反対・ジャッジを順番に担当し、生徒は全ての役割を経験した。

「顔を上げて発表する生徒は少なく、大半の生徒がずっと下を向き、用意した英文を読み上げていました。自分たちではある程度の量の英文を用意してきたつもりでも、時間を持てあまし、押し黙ってしまう生徒もいました」と、英語科の山森和子先生は振り返る。一見、この活動は失敗かと思われたが、生徒からは前向きな感想が多く寄せられた(図3)。

「英語が得意な生徒は高校生に大いに刺激を受けていましたし、英語が苦手な生徒にとっても『自分の英語が通じた』という自信を得る場となっていました。それぞれの生徒に応じた成果が得られた活動だったと思います」と、井田正輝校長は評価する。

「生徒をここまで伸ばしたい」その思いが大切

教員にとって大きな刺激となったのが、中高教員の交流だ。山森先生は次のように話す。

「高校1年生の1年間でサイドリーダーを6冊読むと聞き、中学校での1年間の英語量とのあまりの違いに驚きました。早速、ジュニア向けの英字新聞や洋書を用意し、週末課題で教科書以外の英文を課題に出すなど、生徒が授業外でも英語に触れられる機会が多くなるようにしました」

政氏先生は、高校教員の丁寧な面談指導をぜひ取り入れたいと話す。

「英語科教員が英語の学習法について、生徒と個別に面談するのは、効果が大きいと感じました。放課後は部活動や進路指導で多忙ですが、生徒のためを思えば時間を確保すべきなのだと思います」

政氏先生は、高校教員との模擬授業でT2を務めた。T1の高校教員に題材を提案し、設問も作成。意見交換をしながら教材を作成した。

「本校では英語は習熟度別授業を実施し、私は普段、英語が苦手な層を担当しています。ですから、高校で行われているAll Englishの授業はレベルが高すぎると戸惑いがありました。しかし、T1の先生とのやり取りやグループ討議を通して、教える側が生徒をここまで伸ばしたいという思いを持つことが大切であり、生徒が出来る範囲で満足してはならないのだと感じました」(政氏先生)

同校の英語指導は変わりつつある。All Englishとまではいかななくても、「Almost All English」で英語を使うことを意識して授業を進める。

「高校の授業では、読んだことを基に話し合ったり、自分の意見を書いたりして、4技能全てを使えるよう

に活動を組み立てていました。私の授業は、内容を理解させるだけで精一杯であることに気付かされました。今の授業を見直し、4技能を結び付けられる活動が出来たらと考えています」(山森先生)

中高連携によって、小中連携の重要性も改めて感じている。小学校で外国語活動が始まり、生徒は入学時に英語で自己紹介などが出来るようになってきている。現在でも、校区の小学校と外国語活動の出前授業や年5回の小中連絡会などを行っているが、それを更に推し進めて、入学者の英語力を把握し、指導に生かしていきたいと、井田校長は話す

「GTEC for STUDENTSを機に、生徒に付けたい力が明確になり、よりねらいを意識した授業を行えるようになりました。更に、中高が直接話したことで、双方の指導のねらいを理解でき、その食い違いを埋めることが出来ました。同じことを小学校とも行い、スムーズな小中連携、そして授業改善を進めたいと思います」



七尾市立朝日中学校
校長

井田正輝

いだ・まさてる

「自分を主体的に表現できる力を生徒に育てていきたい」



七尾市立朝日中学校

政氏美香

まさうじ・みか

少人数授業加配担当。英語科担当。「今を一生懸命生きる。自分も周りも幸せになるよう、毎日その時出来る最善を尽くす」



七尾市立朝日中学校

山森和子

やまもり・かずこ

学力向上推進担当。英語科担当。1学年担任。「Don't be afraid of making mistakes.」